

フョイエルバッハの会通信 第103号

【復刻】“切り捨てられたものの復権”の真の意味を問う：寺田光雄著『内面形成の思想史——マルクスの思想性——』（未来社刊、1986.10）紹介

石塚正英

副題に注目する限り、本書の叙述対象はマルクスである。さらに、序章「問題の設定」を一読すれば、本書は、良知力や山之内靖、西川長夫諸氏の研究姿勢を援用しながら、具体的には、マルクスの「ものの見方に含まれる西欧的発展・西欧文明の優位観」(P.13)「マルクスにひそむ西欧近代的価値観」(P.14)や「マルクスにあった社会の脱落者やボヘミアンにたいするぬきがたい道徳的反感」(P.14)を問題にし、これらを念頭において「青年マルクスの人間観とそれを生みだしたかれの内面性の特徴を描くこと」に叙述目標が設定されていることがわかる。だが叙述の分量比をみると、青年マルクスよりも、同時代のルードヴィヒ=フョイエルバッハ（第一章、第五章）、ヴィルヘルム=ハインリヒ=リール（第三章の一部、第四章）、それにフリードリヒ=ハルコルト（第三章の一部）に関する“内面形成の思想史”といった感がある。にもかかわらず本書執筆の直接的課題はマルクスの思想性問題にあるのであって、他の同時代思想家の内面形成は、さしあたって「マルクスの内面的特徴を立体的に浮かびあがらせていこう」(P.16)との意図のもとに検討されることになる。よって本書は、いわゆる“初期マルクス研究”という大枠に括られることになる。

それはそれとして、本書が通例の思想書・思想家双書の類と区別される最大の特徴点を、ここでまず強調して紹介したい。それは、著者が自らの研究姿勢——特にフョイエルバッハ研究について——あえて他の研究者のそれと比較して述べた次の一文に、端的に示される——「このさいまず山之内靖の近年の注目すべきフョイエルバッハ理解について触れておかねばならない。というのは、山之内のフョイエルバッハ理解は、同時にマルクスの思想性を云々する重要な問題提起になっているからである。しかしわたしは、ここでその全体にかかわるつもりはない。なぜなら氏とわたしの間には思想に向かうかなり大きな方法上の相違があつて、わたしのように思想を思想家の内面形成に即しつつその諸見解を統一的な像に再編成しようとしているものにとっては、氏のフョイエルバッハ理解はあまりにも理論先行型でとらえがたいからである。」(P.183-184)

このようにして著者は、とりたてて、フョイエルバッハほか諸思想家の「内面的経験性」(P.187)を重視することになる。因みに、本書（本論部分 190 頁）中に「内面形成」ないし「内面」という術語は、次のような文脈において使用されている。「人間は自由で平等であるべきだとするマルクスの主張は、内面の構造にどういふふうにおさめられているのか。」(P.25)「リールのこの指摘は、守旧性のもとにおいてであるが、確固たる内面性を保持している側からの、近代化、とりわけドイツ近代化への鋭い批判であつたといえる。」(P.127)「普遍的理性とは、自己の内面的世界全体にとって何なのか、これがかれ（フョイエルバッハ——引用者）の問題であつた。」(P.139)「フョイエルバッハは、何ものかにかかわるとき自己の内面的必然性や内面との関連をすこぶる重視した。」(P.142)また同時に著者は、個々の内面的経験性の対象化、ないしこれを前提とした上での各思想家の社会問題への係りに言及する。例えば、「マルクスによる個々の内面状況の社会関係へのこうした還元の仕事は、直線的である。」(P.68)とか、「俯瞰的な社会理論の形成には、フョイエルバッハのように自己の内面的経験性にこだわる思想家のばあい(マルクスもある程度そうであつた)、同時に自己の立っているところを状況のなかでとらえかえす思考様式が必要であつた。それは、内面問題を社会関係の問題として考えていく思考様式でもあつた。」

(P.187)

著者の研究姿勢と研究方法に関し、ここまで紹介ないし引用してくれば、大方の読者諸氏にはすでに次のような、評者側のちょっとした連想を納得していただけるであろう。そう、近年の社会思想史研究においてとみに指摘されている、かの”当事者が生きた時代状況に、ないし原体験に即して”とか”同時代的コンテクストに組み込んで”とかの警告的研究姿勢を補強する位置に、本書の叙述目標が設定されているのである。われわれは、ともすると活字になってしまった文面——思考の結果、ないしは”内面形成”の対象化された部分——を通してしか、過去の思想家と対面できない。思想の中途は、せいぜい後世に遺された手書草稿や異稿、しくじり草稿、蔵書への欄外記入などを手がかりにして、その思想家の未定稿段階の構想や雑感として知るのみである。それは”断片”にすぎない。それだから、本書の主題であるところの、マルクス等特定思想家の”内面形成”の探究は、最も捕え所のない部分として残されがちなのである。この指摘は著者にとっても自明のことであって、例えば 1848 年革命時におけるフォイエルバッハの思想的・内面的動向に関連して、著者は幾つかの事例を挙げたあと、次の推測を行なう——「こうした事例から、三月革命期だけでなく革命挫折後もフォイエルバッハは、急進的共和主義者たち、それも徹底した社会革命の志向者たちに、大きな親近感をいただいていたと推測できよう。」(P.162) とはいえ、この類の推測は、”内面形成”の問題に深く入り込んだ著者にとって、ひとつの確信として語るができる。すなわち、1848 年の「フォイエルバッハにとってシュトゥルーフェの変革路線が、かなりの程度承知しえたものであった」(P.162)との叙述部分は、フォイエルバッハの”内面形成”から導き出された著者の確信であって、外にあらわれたフォイエルバッハの”行動様式”のみからの推測ではないのであり、況や思考の結果としての、公表を前提として書き残されたもの——1851 年刊のハイデルベルクの講義への序文など——からの推測ではないのである。寺田著作の真骨頂は、存外、このあたりに存する。けだし、本書の副題はやはり副題でしかなく、マルクスよりも、マルクスの内面形成、延てはそれを探究する一助としてのフォイエルバッハ、リール、ハルコルト等の内面形成に、叙述上の最大比重がおかれたのである。

ところで、このようにして、マルクスおよびその同時代思想家たちの内面形成を本書によみとってみると、ここでは〈マルクス対フォイエルバッハ〉というよりむしろ〈マルクス対リール〉の方がいっそう対照的に論じられていて、なかならずく意味深い。両人の対立はこうなる——「個と類の関係様式という点で、マルクスとリールは対極的な見方に立っている。リールは、個が類に埋没した農民身分の姿に社会の安定的基盤をみ、そこから社会のあるべき姿を構想した。これにたいしてマルクスは、自律的個人の相互成長的な関係として類をとらえ、そうした関係を全面的に実現する社会を理想像としていた。(中略)マルクスは、近代化にともなう個々の人間の内面世界の形成を前提にして未来社会での個々人の『自由な発達』と人間関係の『ゆたかさ』を希求した。リールはしかし、近代化にともなう個々の内面世界の形成に、未来社会の混乱を見た。それは、個々人の自己同一性の喪失、相互の内面関係の崩壊であった。」(p.187-188)

こうして、マルクスとリールとを対照的に述べることによって、著者の結論は、再び序章の良知・山之内・西川各氏の研究姿勢に関連づけられていく。良知氏のいう「歴史なき民」がリールの背景に五万といる。しかしながらマルクスの背後には、そのような民は 1 人もいない。「リールが眼前に観察した人びとの内面喪失や相互関係の崩壊は、マルクスの配慮の対象ではない。」(p.188)のである。ここまで述べて本書が締括られているのなら、寺田氏の意図は小生産者・スラヴ民族等の側からする西欧近代至上論者マルクス批判として完結していくのだが、氏は余韻を残している——「確かにマルクスは論理構築の過程で、かれの内面形成にそぐわない内的あり方はもちろん、想像力の及ばないもの、認識の及ばないものは、被支配階級であろうと民族であろうと切り捨ての対象にしてきた。しかし、

切り捨て部分を語ることは（語ること自体は重要であるが）、マルクスの思想の本質を語ることではない。」(P.188-189)。著者は、以上の諒解に立ってはじめて、「切り捨てられたものの復権」(P.189)が真に、リアルに捉えられると考えるのである。そこには”切り捨て”を敢行した張本人を被告席に据えることなくして”切り捨て”の対象になった「歴史なき民」の再審を要求することはできない、などという白黒映像のごとき二者択一判断は、けっして差しはさみえない。何故であろうか？ それに明確な返答を与える作業こそ、本書『内面形成の思想史』の課題であるはず、といえよう。ただし、本書のモチーフは、かくのごとき小冊子——四六判 272 頁、つまり分量的な意味で小と述べたにすぎない——ではどういふフォローしきれない。よって寺田氏には、次なる一作を期待する。

なお、紙面の都合で、補論に触れることができなかつたことを付言しておく。

注記：本稿は、まえもって以下の媒体に掲載されている。社会思想史の窓刊行会編集・発行『社会思想史の窓』No.31 1986.12.20

〔編者註：その他のフョイエルバッハに関する石塚氏の旧稿の一部が下記に掲載されている。
<https://blogs.yahoo.co.jp/takadamasuya/33161393.html> ならびに同アドレスの/33163418.html〕



「食べること」をめぐる冒険 — 「食べること」の哲学風エッセイ —

小林荘介

第 1 回 執筆動機

私は、これまで、食べて、飲んで、話して、笑って、仲間を作り、学び・働き・遊ぶ環境を作ってきた。

その発想の源は、幼少期に経験した自宅や隣近所の家でのにぎやかな宴会、酒害多き親類による反面教師的成育環境、父が我が家に連れてきたシスターたち（カトリックの修道女たち）とのお茶飲みである。これらの幼少期の経験が 30 半ばを過ぎた今の自分にも影響を与えている。

私はけっして明朗快活でコミュニケーションが得意な人間ではない。むしろ、基本的に体力がなく気弱で思考も動作も鈍くコミュニケーションが下手で対人関係作りに困ってきた人間である。そして、その癖、寂しがり屋であり、人が好きである。

寂しがり屋であり、人が好きで、人と関わりたくて、宴会、懇親会、お茶会を開くが、そこで人と主体的に十分に関わり楽しめるほどの体力や諸能力が備わっていない。

この人と関わりたい願望と能力のギャップによる苦しみが私の第 1 の苦しみである。

しかし、こういった第 1 の苦しみがあるのに、中途半端に、食べには食べ、飲むには飲み、話すには話し、笑いには笑い、仲間ができるには仲間ができ、中途半端に、それによって精神的な孤立から免れ、仲間の中で仕事をもらい、責任を果たし、仲間同士交流に役立ったことを喜び、人生上の意味をもらい、中途半端に、日々の心の糧を得られ、仲間からの支えを受けてしまう。つまり中途半端な意味の充実、これが第 2 の私の苦しみである。

第 1 の苦しみ（願望と能力の差による苦しみ）と第 2 の苦しみ（中途半端な意味の充実による苦しみ）、それゆえに、仲間と共にものを食べることの苦しみが構成されている。

この苦しみを解決する方法は、より大きな満足を諦めて、いまある状況に満足することである。だから、私はこの苦しみを終わらせようと思えば、終わらせることができると思っている。

しかし、私は、もう少しこの苦しみのなかに踏みとどまり、踏み込んで、自らを事例として考えた仲間と共に食べることの苦しみを足掛かりとして、「食べること」が持つ様

々な側面について考えてみたい。

この連載を通じて、「食べること」が持っている意味の豊かさを探求し、考察し、整理し、「食べること」をわきまえて、ものを食べることができたら幸いである。

今後の予定としては、精神分析における食べることと取り入れること、摂食障害の治療理論、異食症の概念、キリスト教の聖餐論、フョイエルバッハの哲学における「食べること」などを考えている。これらには、自分は、昔、不登校・引きこもり対策事業の家庭訪問相談員であったこと、自分の父がカトリックの信者（私はノンクリスチャン）であることなどが関係している。

自分の乏しい体力面やゆっくりとした精神活動のテンポを考えれば、人付き合いなどをせずに、静かな場所で黙々と本を読み、ときには筆をとり、思索を深め、疲れたら一人で散歩に出かけ、外の空気を吸い、そこでもまた、ものを考えるような生活が自身の身の丈にあっていて楽である。

人よりも気力体力もなく機敏な才覚がなく寂しがり屋の私にとっては、一人静かにゆっくりとものを考え表現することが許され、人と社会とつながりをもてる執筆の場を与えられたことは大変有り難い。この場を与えて下さった川本隆先生に厚くお礼を申し上げます。
〈つづく〉

〈書誌情報〉

青柳雅文「書評 服部健二著『四人のカールとフョイエルバッハ』『レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ』、『立命館哲学』第28巻109-116頁、2017年

討論会の企画について

前号（102号）で石塚氏から、1990年代以降、フョイエルバッハの会を支えてきた主要メンバーの研究が出揃ったこの機会に、服部単著の合評会ではなく、会員のそれぞれの活動を踏まえた討論会に替えよう、との案が出されておりました。この提案を受け、関西方面から上京されるであろう、服部氏の都合を打診してまいりましたが、当人の体調が思わしくなく、検査の連続でうごけないとのお話を伺いました。活動の間延びを恐れ、別の討論会の企画も考えてはみましたが、発起人の石塚氏より、「服部氏の健康が回復し意欲がもどるまで延期しましょう」との声が上がり、今のところ反対意見なしの状況です。したがって、来年の3月ころまで、この討論会企画は、延期ということになりました。もし、この間に、「別の企画をぜひ」といった案がありましたら、川本（t-kawa@toyo.jp）までご連絡ください。

事務局から

*本紙は季刊発行です（次号9月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

*年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フョイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フョイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>